

おがわたまき◎1972年生まれ。映画「PUB」で女優デビュー後、TV・映画・舞台に活躍。女優業以外にもTVのパーソナリティや、本人撮りおろしによるフォト&エッセイ集を出版するなど写真家としての一面も持つ。97年には舞台「広島に原爆を落とす日」でゴールデナロー賞・演劇新人賞、98年には「S.F. サムライ・ウィイクション」で高崎映画祭・最優秀助演女優賞を受賞。2008年1月には映画「陰日向に咲く」(監督：平川雄一郎)が公開予定。



© 瀬戸秀美

【演目】『Hydra ヒュドラ』(世界初演)
 【振付・演出・衣裳デザイン・舞台美術デザイン】インバル・ピント & アウシャロム・ボラック
 【出演】インバル・ピント・カンパニー (10名) 大植真太郎 森山開次
 11月9日(金)・11月11日(日) 全3公演

インバル・ピント・カンパニー『Hydra ヒュドラ』(世界初演)

11月11日公演より

緒川たまき

インバル・ピント・カンパニーのダンサーは美しい。これは彼らの以前の作品『オイスター』や『ブービーズ』を観た時にも共通して思ったことですが、「無駄の無いしなやかな身体」というより、「繊細で、まるで花の蜜だけを吸って生きているみたいに可憐な」という表現の方が近い感じです。

今まではこれがイスラエルのお国柄なのかなと思っていましたが、今回、日本人ダンサーの大植真太郎さん、森山開次さんのお二人が加わった『ヒュドラ』においてもその思いに変わりなく、これはもうインバル・ピント・カンパニーの特色なのだと納得した次第です。ダンサー達の儚げな美しさが、国や時代を超えて彷徨^{さまよ}っている感じを抱かせてくれて、なんだか胸のあたりがキュウウとなりました。

『ヒュドラ』は、宮沢賢治の世界をモチーフにした作品と聞いて、てっきり童話的な世界が絵本をめくるように展開するのだろうと思っていたのですが、樹々の間を風が運ぶものをじっと見つめているような静かな豊かさとも言うのでしょうか。まさに自然観察をライフワークとした宮沢賢治の世界そのものだと思います。

動きを止めた女性ダンサーが、細い棒によっていとも容易く運び去られるシーンの哀しいほどの美しさが今も忘れられません。

『ヒュドラ』を観ながら私の脳裏に浮かんたのは、つい数日前の出来事です。部屋に飾っていた真つ赤なガーベラが、萎^{しお}れる事なく綺麗な色のまま枯れていきました。その様子があまりに美しかったので、もうしばらく眺めるつもりでそのままにしていたら、ある日花びらの下に見慣れない薄紅色のふわふわした塊を発見しました。タンポポの綿毛を大きくしたような薄紅色の物体、なんとそれはガーベラの種子でした。

どこか相応しい場所へと運ばなければと思うってしまうほど儚げな佇まいに、とても感動しました。私の日常に突然現れて、目を釘付けにしてしまった薄紅色のふわふわした存在。『ヒュドラ』の世界と重なるものを感じました。